

伊勢の中世

第 3 2 4 号
伊勢中世史研究会
令和7年7月1日発行

事務局：〒515-2321 三重県松阪市嬉野中川町 1524-121 竹田憲治方

メール takeda@ztv.ne.jp ホームページ <http://mietyusei.bakufu.org/>

宮古の石風呂

本稿は度会郡玉城町宮古地区で令和6年2月18日（日）に行われた「宮古の御頭神事」の内、石風呂での潔斎行為について、筆者が実際に潔斎を体験した内容を報告するものである。なお、当該文化財は「宮古の石風呂」として、昭和40年に三重県指定有形文化財に指定されている。御頭神事部分については、『伊勢の中世』260号に拙文を投稿している。

1 石風呂の構造

石風呂の構造については、各先行研究でも触れられているが、『玉城町史下巻』民具の章に詳しい。その内容を転載しつつ補足も加え紹介すると、6尺×16尺、平屋の東西切妻棟造、瓦葺きの建物で、焚場、温室、脱衣場の3つの空間に分かれており、焚場と温室の間は土壁にモルタル仕上げでの壁で仕切られている。焚場の焚口は、温室と仕切る壁の中央部分に幅約40cmの間口で、深さ約30cm床面より掘くぼめられている。焚口には片岩と思われる石材が用いられ、両側袖石を立て、横に寝かせた一石を渡して梁にしている。この構造は、芸濃町（現津市）で実施された野呂氏館跡での発掘調査で確認された中世（16世紀中頃）の蒸風呂遺構の状況とよく似ている。また、温室の規模も宮古のものが約1.5m×1.8mで、野呂氏館のものが2.3m×1.8mで近似している。建物への入り口がある南面中央には三本足の注連縄がかけられている。その他、建物詳細は玉城町史掲載の実測図を参照されたい。

2 石風呂の内容

本節では、筆者が見学および体験した石風呂での潔斎の内容を、時系列に報告する。

筆者が石風呂に到着したのは早朝午前5時30分頃であった。この時点では、周辺はまだ暗く、神事の当番数名が焚口で火の番をしていた。火は日付が変わる頃に着火され、当番の内2名が寝ずに燃料をくべ続けているとのことであった。石風呂の建物前にはムシロや青竹が既に置かれている状態であった。

午前6時30分頃、次第に明るくなり始めると、他の神事関係者も参集し、熱した石の上に青竹を運び入れる。青竹は両端を縄で結び簀の子状になっている。その上に、石風呂の建物の横にある池に漬けられていたムシロを敷き、さらに水をかけると、激しく水蒸気が発生し、建物の外へも煙が漏れ出すほどである。

午前7時、下区の祢宜が池の前に祭壇を設け、二見浦で汲まれた海水と塩を池にまき、

関係者一同が手を合わせ一礼する。上区の祢宜等の参加はない。池の前には事前に笹竹が2本刺され、2本の間に注連縄が張られている。

その後、祢宜から順に関係者が石風呂に裸で入って潔斎を行う。同時に2～3人は入れる。石風呂には関係者以外も入ることができるということで、筆者も潔斎に参加させてもらった。石風呂の中は、水蒸気が充満し、天井方向へ上昇するため立ったままでは息苦しく入ることができなかった。そのため、ムシロの上で屈んだ状態で数分間じっとしている状態で入浴した。焚口からの火の熱を最も受ける奥の方は高温で、手前の方での入浴となった。部屋の中には、高温になった石の上に置かれた青竹が炭化していくためか、燻ぶった独特の匂いが充満していた。当日は入口部分に電灯が仮付けされ、充満した湯気の中でもなんとか内部が視認できたが、電灯がなければ窓はなく暗い部屋の中での入浴になる。このような状態は、神事前の潔斎という意味では、いよいよ神事に携わる心の準備が調うのではと感じた。6時間以上かけて石を熱し入浴する石風呂であるが、温度の管理、水をかけるタイミングや水量の調整などがとても難しいものであると感じた。今回は神事関係者数名の入浴だけであったが、短時間の内に青竹は炭化してしまっており仮に地区住民が入浴を希望した場合、簀の子やムシロの交換や火力の調節に工夫を要する。着火以前の準備からはじまる一連の労力を考えると、御頭神事という地区でも重要な神事の時に入浴する特別なものであると感じた。

午前8時、潔斎を終えると、旧梶原寺境内にある祠からオカシラサン他、御頭神事に関わる道具を出し、宮古区公民館へ運び、公民館縁側に安置される。梶原寺は令和4年頃に老朽化のため解体されたため、公民館へと安置場所が変更されている。

3 かつての石風呂での潔斎

先行研究においても、日付が変わる頃からおよそ6時間をかけて石を熱していく点や、燃料材に松のジンを用いる点は共通している。一方で、かつては御頭神事前の潔斎に用いる以外にも旧大晦日早朝にも用いられた点や、伊勢市河崎の天神浜で潔斎して石風呂に入った点に変化がみられる。

宮古地区の区長様をはじめ関係者の方々には、石風呂への入浴という得難い体験をさせていただきました。末筆ながら記して深謝申し上げます。 (味噌井 拓志)

<参考文献>

祝 宮静 1962「伊勢国度会郡宮古の石風呂について」『神宮を中心とする文化財-文化財集中地区特別総合調査報告第1集』

堀田 吉雄 1969「宮古の御頭神事」『伊勢民俗八ノ二巻』伊勢民俗学会

金子 延夫 1984「石風呂」『玉城町史第3巻』

芸濃町教育委員会 1984『野呂氏館跡発掘調査報告』

鬼頭 秀明 1992「「ギッチョバイ」と「御頭神事」」『半田市立博物館研究紀要 14』

野呂 純子 1993「宮古の御頭神事」『三重県の民俗芸能』

玉城町 2005『玉城町史下巻』

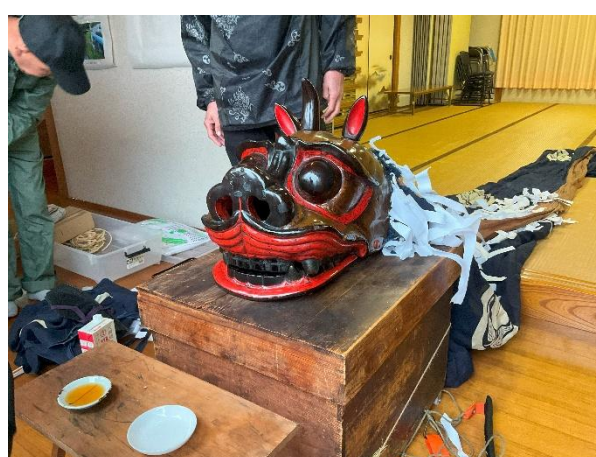


石風呂（手前）とかつての梶原寺（令和4年2月撮影） 石風呂



池の前に張られたしめ縄

石風呂内部（温室）



焚場（焚口）

公民館に安置されるようになったオカシラ



焚場の管理



簀の子を温室に運び入れる



温室に簀の子とムシロが敷かれ、蒸気がたちこめる



風呂前の池への拝礼



関係者が順番に潔斎を行う



筆者も入浴させていただいた



潔斎後の簀の子とムシロは一部炭化してしまっている



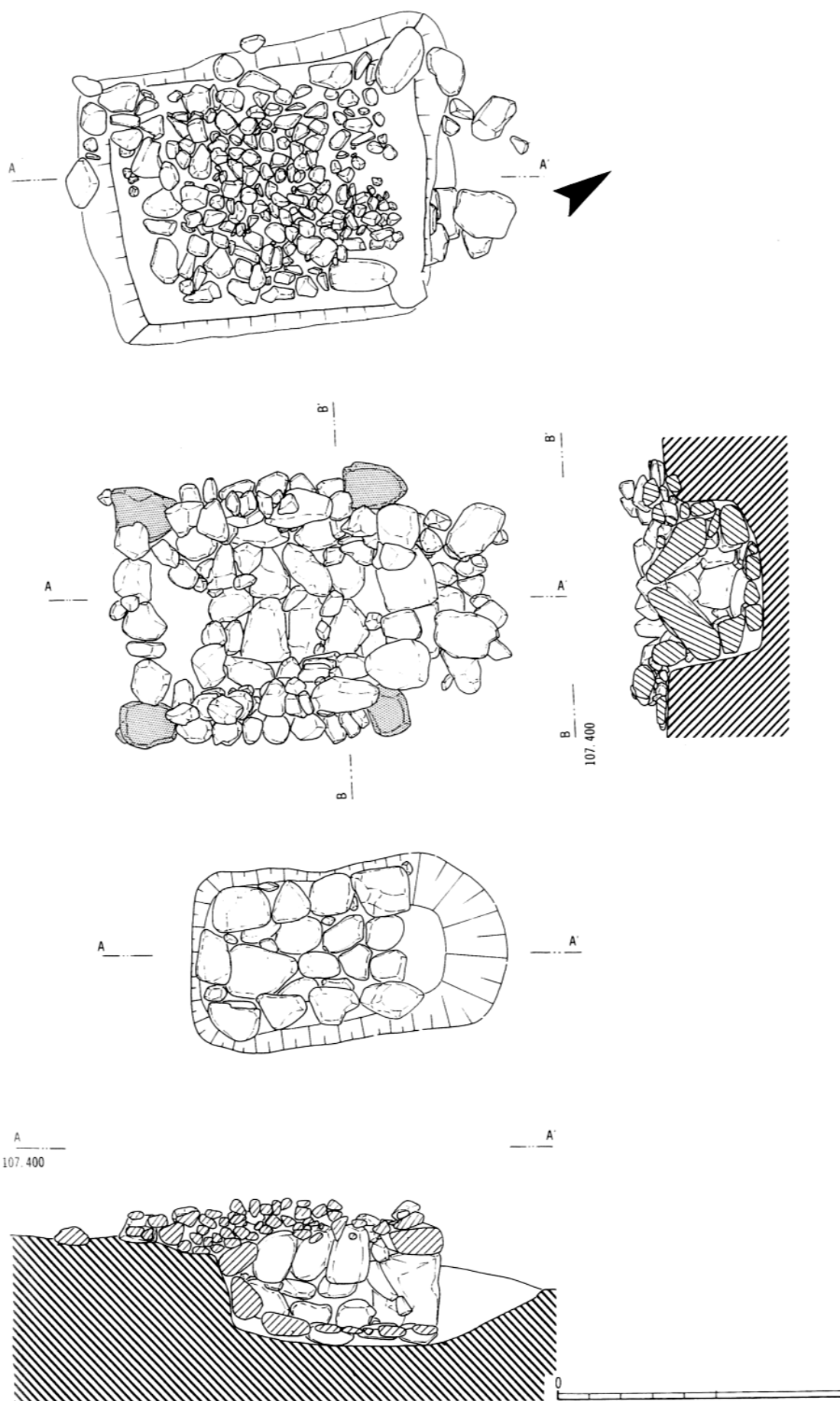


SF 1 蒸風呂

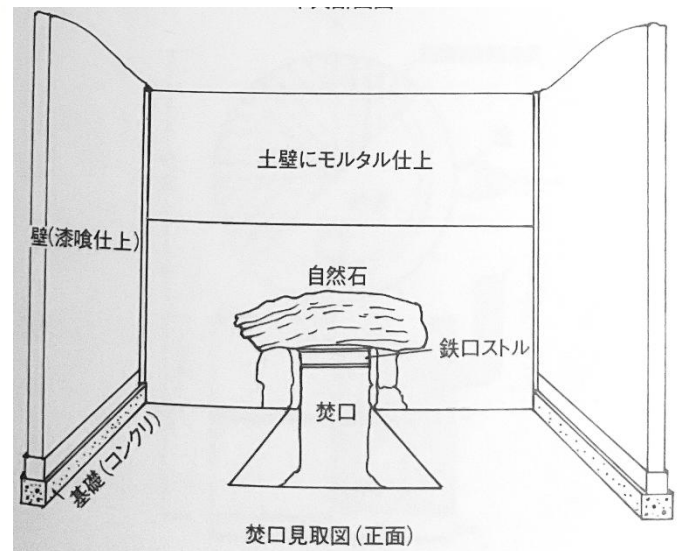
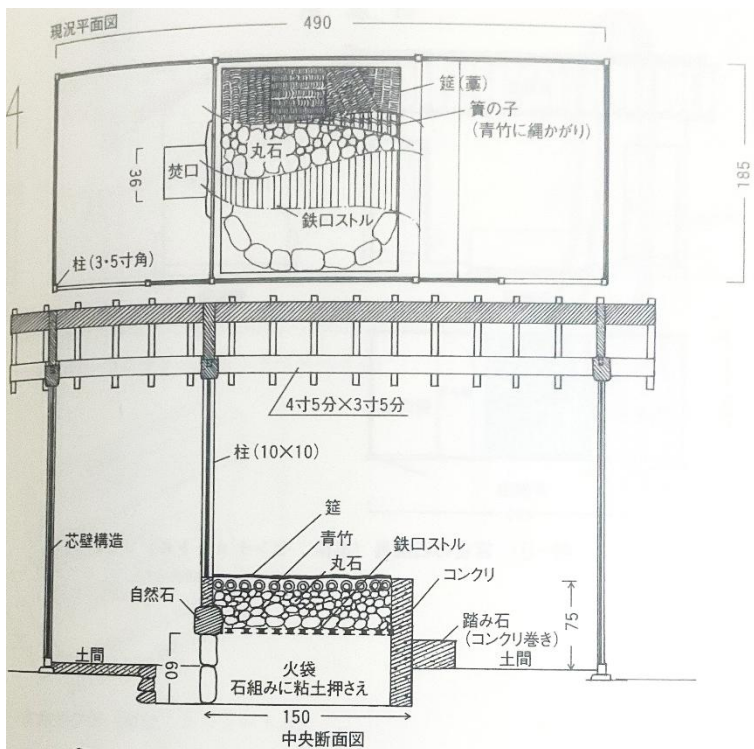
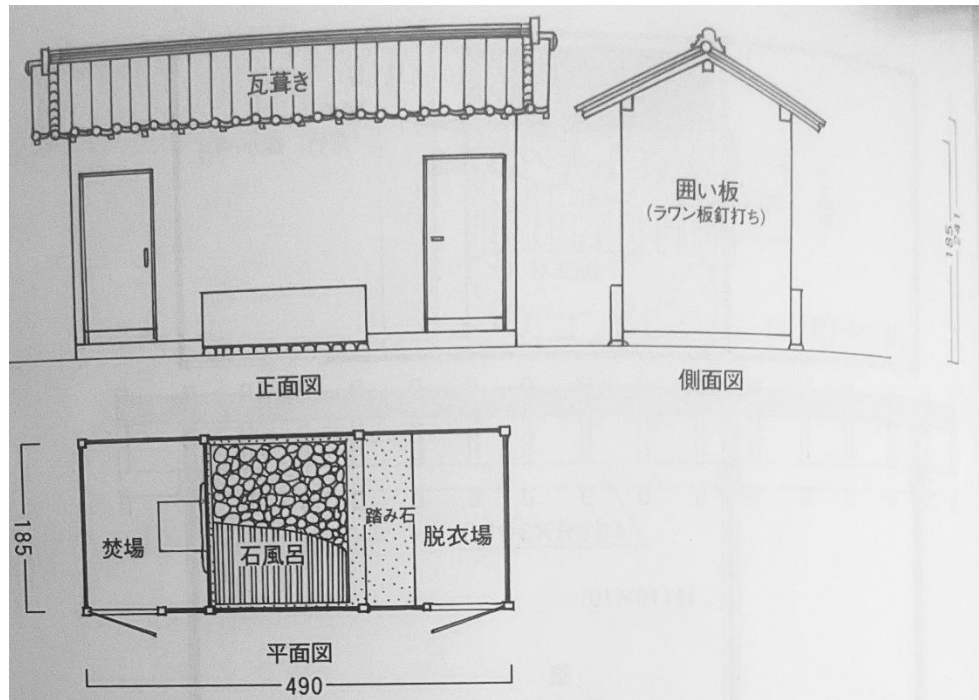


SF 1 蒸風呂（焚口付近）

『野呂氏館跡発掘調査報告』より



『野呂氏館跡発掘調査報告』より SF 1 (縮尺任意)



『玉城町史下巻』より